

2. 学科

2.1. 人間発達科学科

1. 運営

新学科（人間形成学科）が発足して2年が経過したこともあり，学科の運営体制は新学科に移行し，特に人間発達科学科としての運営会議を持つことはなかった。

2. 教育

3年次生が最終学年であるが，過年度生を含めて適切な教育指導により滞りなく卒業させることが求められている。

3. 今後の課題

教員の意識と業務が新学科中心になっているが，次年度は人間発達科学科として最終年度の学生が卒業論文を作成する時期でもあるので，教員一人ひとりがそのことを自覚し，授業，ゼミ及び学生指導等，日常の教育業務に励む必要がある。

（人間発達科学科長 中林稔堯）

2.2. 人間環境科学科・人間環境学科

1. 運営

学科に関する意思決定はすべて学科・専攻運営会議で行われた。運営会議は学科長と各講座主任の計5人で構成される。今年度は13回開催され（2月28日現在），人事，予算，研究，教育，入試等に関わる重要案件を審議・決定した。

特に学科の活動として，教育研究活性化支援経費（本部申請，150万円）と学部シンポジウム経費（60万円）の支援により「市民と大学の環境フォーラム」を開催した。学科として初めての内外に向けた取組みであり，詳細を後述する。

2. 人事

昇任（教授）人事1件，採用人事2件（専門分野「環境地質学」「数理統計学」）を人事委員会に提案し，教授会で承認された。

3. 予算

学部から学科学生当経費として計上されたうち，9,700円を高校生説明会用の資料費用として執行し，残りはコース共通経費に振り替えた。

4. 入試

- (1) 社会人特別選抜（定員5人）は5名の志願者があり，2名の合格者を決定した。
- (2) 平成19年度前期日程・後期日程選抜において，前期日程（文科系受験コースは3.7倍，理科系受験コースは2.3倍），後期日程（小論文受験コースは9.1倍，理科系数学受験コースは9.6倍）であった。平成15年度からの倍率の推移は以下のとおりである。

	H15	H16	H17	H18	H19
文科系受験コース	3.8	3.5	3.6	3.1	3.7
理科系受験コース	2.6	3.9	2.5	2.9	2.3

理科系受験コースの2.3倍は過去最低である。理系離れ又は少子化の影響か分析する必要がある

ある。

- (3) 第3年次編入学特別選抜は、自然環境論コースと数理・情報環境論コースで実施された。今年度は自然環境論コースに2名、数理・情報環境論コース志願者8名の志願者があり、3名を合格とした。
- (4) 人間環境学科としての2年目のA0入試を実施した(定員8名)。13名の志願者があり、第1次選考により6名を合格とした。第2次選考は、ポスターセッションと筆記を含む面接により行い、全員(6名)を合格とした。第2次選考で合格した者のうち、大学入試センター試験の基準点(420点)により、最終合格者は1名であった。実施方法等について検討する必要がある。

5. 教育

- (1) 4月6日に、104名の新1年次生を迎えガイダンスを行った。新学科の全般的な説明後、各コースからコースの特色、カリキュラムや1年後のコース受入れの基準等の説明をした。学籍番号により学生を4グループに分け、各コースから選出された担当教員4人により、履修相談やコース進路相談等の指導体制をとった。

2年次生に対してコース配属のためのガイダンスを4月5日に行った。今年度もコースの希望者数がコースの受入れ数の範囲内におさまり、社会環境論コース29名、生活環境論コース30名、自然環境論コース19名、数理・情報環境論コース23名を決定した。

- (2) 来年度3年次後期に「人間環境科学総論」が開講される。新学科共通教育の最重要課題であり「概論・総論実施委員会」において講義内容及び運営方法について検討した。以下は講義の概要である。

本講義は、人間環境学科3年次生を対象とする共通科目であり、人間を取り巻く諸環境に発生する問題を、4つのコースに含まれた多様な専門的知見に基づいて検討する。ここでは、
・環境の変化、
・環境の変化に対する生物の応答、
・環境の変化に対する人間の応答、
という3つのテーマを設定し、それぞれ4名の講師が自らの学問研究の立場から選ぶ問題を具体的に議論し、各テーマの最後の時間には、総括的な質疑応答・討議が行われる。この講義では、受講者が、個々の専門研究を進める上で必要となる認識方法や学問的視点を習得し、併せて人間環境学科において共有すべき問題意識についての理解を深める。

6. 研究

- (1) プロジェクト研究

教育研究活性化支援経費

研究題目：「参加型環境学習プラットフォーム」の創造とそれを生かした「行動できる環境人材」の養成

研究題目：A0入試を通じた科学者育成のための高校と大学の教員間のネットワークの形成と接続教育の試行と展開

発達科学研究推進経費

研究題目：六甲山・大阪湾周辺の地域環境学創成の予備検討

研究題目：色の科学と芸術の解明

発達科学シンポジウム経費

研究題目：ネットワーキングを通じた環境課題に対する市民のエンパワーメント

科学研究費補助金

研究題目：大学における数理情報教育に求められている課題の分析とその改善に関する研

究（基盤研究(B)，平成 16～18 年度）

研究題目：地中レーダ・分析電顕を用いた十勝沖，兵庫県南部地震で損傷斜面の降雨による崩壊予測（基盤研究(B)，平成 16～18 年度）

研究題目：都市中間層における住宅条件の構造再編（基盤研究(B)，平成 16～18 年度）

研究題目：集団ケアから個人の尊厳にもとづくユニットケアへの移行研修プログラムの開発と評価（基盤研究(B)，平成 17～19 年度）

(2) 公開講座

大学連携「ひょうご講座」(発達科学部，兵庫県主催)

題目：環境科学の金字塔と今後への展開

開催期間：9 月 13 日～11 月 1 日（毎週水曜日）

場所：兵庫県立神戸学習プラザ

受講対象者：一般市民

趣旨・目的：環境科学の歴史のうえで大きな寄与をなしてきた金字塔とも呼ぶべき研究，一時代を画した書物などを選んで現代の立場から読み直し，単に物知りになることにとどまらず，これらをこれからの環境科学にどう生かしていくかを考えていく。テーマは以下のとおりである。

1. 序章及びローランド「フロンガスがオゾン層を破壊する」，ファーマン「南極オゾンホールが発見」
2. 序論及びローマクラブ「成長の限界」，「限界を超えて」
3. レイチェル・カーソン「沈黙の春」
4. シーア・コルボーン「奪われし未来」
5. 有吉佐和子「複合汚染」
6. 1992 年リオデジャネイロ「地球サミット」での「生物多様性条約」
7. ジェームズ・ラブロック「ガイア仮説」
8. 1988 年アメリカ上院エネルギー委員会でのマナベ証言とハンセン証言及びまとめ

7. 広報

8 月 1 日と 8 月 8 日に高校生説明会が開催された。人間環境学科の参加者は，1 回目は 187 名，2 回目は 182 名であった。学科の特色，卒業進路状況，就職先等の説明を行い，質疑応答後，高校生の希望に応じて，それぞれの会場に分かれてコースの説明会を実施した。

8. シンポジウム

(1) 市民と大学の環境フォーラム

発達科学部主催（実行委員会を組織），兵庫県立人と自然の博物館の協力，兵庫県と神戸市の後援を受け，平成 18 年 11 月 26 日（日）10:00～17:00，神戸大学百年記念館と瀧川記念学術交流会館において「市民と大学の環境フォーラム」を開催した。環境保全における市民の果たす役割が重要性を増す中で，環境活動に取り組む NPO などの市民・行政・大学の学生・研究者などの交流を図るとともに，環境市民活動に対して大学の果たすべき役割について議論することを目的として企画された。

当日は 120 人余の参加者があり，午前には NPO 法人アサザ基金代表理事の飯島博氏により，「霞ヶ浦アサザ・プロジェクト」というテーマで茨城県霞ヶ浦の環境保全に対する市民・学校・

自治体・企業などの協働に関する招待講演が行われた。午後のワークショップでは、国連大学高等研究所の名執芳博氏による「持続可能な開発のための教育と地域拠点」の紹介、早稲田大学高等学院の高校生による「高校生環境連盟」の紹介の後、里山の保全・環境汚染・物質循環・環境教育・若い世代の環境活動への参加などについて、3グループに分かれてディスカッションが行われた。また、1日を通じて、環境保全に関わる市民活動、大学における研究・調査など、約60件のポスター発表があった。

(詳細については、http://envforum.h.kobe-u.ac.jp/about_poster.html 参照)。

和やかな雰囲気の中で、環境への取り組みについて市民と大学などが相互理解を深めることができた。また、事前及び当日の企画・運営に20名程度の学生スタッフが参加し、教育プログラムとしての目的の一つである「行動できる環境人材育成」においても一定の成果を収めたと考える。

参加者のアンケート結果からは、概ね良好な評価が得られたことが分かる。今回の成果を活かし、来年度以降も同趣旨のシンポジウムを継続的に開催していく予定である。

(2) 理系 A0 入試ワークショップ

テーマ：自由研究・課題研究の指導法と評価法

日時：平成 19 年 3 月 17 日～18 日

場所：発達科学部大会議室

趣旨：昨年度のシンポジウム「理系 A0 入試を通じた高校と大学の接続 21 世紀における科学者養成の新展開を目指して」に引き続き、神戸大学教育研究活性化支援経費による戦略的・独創的な教育研究プロジェクト事業の一環として行われた。一般入試にかかわる信頼できる評価方法を開発することは、21 世紀の日本の科学にとって重要なことである。科学賞の審査や評価に関する豊富な経験を有する高校や大学初年級の現場で、学生・生徒の研究的な活動の指導をされている方などを講師として招き、自由研究・課題研究の指導法と評価法について知見と情報を交換する。

9. 大学院再編

研究科の平成 19 年度部局化を目指して、本学部に「人間発達環境学研究科」を設置する案が平成 16 年度から検討され、平成 18 年度は構想審での審査が行われた。人間環境学科に関わる専攻は「人間環境学専攻（前期課程・後期課程）」となり、前期課程については総合人間科学研究科の「人間環境科学専攻」から「科」を削除したもので本質的には変わっていない。しかし、後期課程は、従来、他専攻・他研究科にまたがっていた人員配置が改組により統合され、前期・後期課程を通しての大学院教育の充実が図られることになった。構想審での審査に関わっての特段の変更はなかったが、学位については博士（学術）を基本としつつ、博士（理学）を授与できることになった点は特記に値するであろう。

また、平成 18 年度は、新研究科に関わる初めての入試を実施した。従来の総合人間科学研究科では、後期課程入試は 3 月に実施していたが、人間環境学専攻のみは、第 1 期と第 2 期の 2 回行うことになった。なお、構想審での審査が長引いたため、実際には前期課程入試は、11 月 25 日（土）、また、後期課程入試は、12 月 9 日（土）に行った。前期課程入試の外国人特別選抜に関わって、一部科目で英語訳をつけての出題と英語での解答を認めることになったが、今後さらに検討することになった。

（人間環境科学科・人間環境学科長 白倉暉弘）

2.3. 人間行動・表現学科

1. 運営

新学科体制に移行して2年目で、人間行動・表現学科の学生は3年次生以上である。学部の運営体制は基本的に新学科となり、今年度は人間行動・表現学科としての運営課題は殆どなかった。人間行動・表現学科として残る課題は教務関係であり、教務担当教員、講座主任、学科長で残務処理を進めた。

2. 予算

予算配分は新学科に対して措置されるため、人間行動・表現学科としては予算を持たない。

3. 入試

昨年度まで実施していた3年次編入学試験も新学科の入試に変わり、人間行動・表現学科としての入試はなくなった。

4. 教育

昨年度と同様、学科共通科目未履修者に対する再履修のためのカリキュラム対応を行った。本年度で未履修学生はいなくなる予定である。

5. その他

研究、広報、その他に関しては、特記する事項はない。

(人間行動・表現学科長 平川和文)

2.4. 人間形成学科

1. 運営

新学科発足の1年目として、昨年度より執行されている学科を中心とした運営体制の実質化を図るべく運営を行った。新しい授業科目、特に、今年度は新設の1年次生向け学科共通授業科目の内容の充実が急務であり、多くの学科構成員がそのために努力を行った。

年度途中より大学院の大幅な改組が進行し、多くの学科構成員が様々な仕事を同時にこなさなければならない状況が存在し、時間的にも精神的にも十分な運営ができなかったというのが正直なところである。

第2水曜日が学科運営会議の定例開催日となっているが、上に述べたような事情から実行できなかった。急を要する人事が数件あり、持ち回りの運営会議を含めて全体として12回程度の会議を持った。

新学科の発足に伴い、会議の定例化を図り名実ともに学科の意思決定機関としての機能を持たせることが課題である。

2. 人事

昇任(教授)人事1件と採用人事4件を人事委員会に提案し、教授会で承認された。年度途中より急浮上した大学院改組との関係で、学科の将来を見据えた人事構想を練る時間がなかった。しばらく採用人事がない見込みなので、少し時間をかけて人事構想を練る体制づくりが必要だと考える。

3. 入試

一般選抜については例年どおり行われ、特に大きな問題はなかった。

社会人選抜試験についても従前どおり行われ、特に大きな問題はなかった。ただし、選抜に当

たり、合格者の水準確保のための学科（人間発達科学科）の申合せに留意して行った。

第3年次編入試験についても例年どおり行われ、特に大きな問題はなかった。優秀な学生を確保できていると実感している。

なお、学科構成員の数が旧学科に比べて減少したため、社会人選抜と第3年次編入試験の二つの仕事を同日に実施する上での工夫が必要であることを感じた。

また、オープンキャンパスについては、今年度も昨年度に引き続きコースごとに丁寧に高校生たちに対応したことは良かったと考えている。コースによっては、在生が出席したところもあり、次年度以降も積極的に踏襲したいと考えている。

4. 教育

新年度当初にオリエンテーションを行った。ほとんどすべての教員が出席し、盛り上がった。教員も大変忙しくなっているが、年に何回かの大事なイベントには積極的に参加していく必要を強く感じた。

従前行っていた後期開始当初の2回目のオリエンテーションを今年度は省略したが、そのことが後述するコース分けに微妙に影響を与えたように思われるので、次年度は復活する必要があると感じている。

オリエンテーション時に、例年同様教員免許取得希望調査を行ったが、60%を超える学生が希望しており、これは近年の傾向である。

また、例年と同様簡単なアンケート調査を行った。結果については、学生たちへ開示（掲示板に掲出）すると同時に、学科のすべての教員に文書で配布した。新学科においてもこのアンケート調査は継続したいが、その調査内容の見直しと同時にもう少ししっかりとした分析とまとめを作る必要を感じている。

コース分けについては平成18年2月16日に行い、下記のように全員所定のコースに配属が決定した（カッコ内は受入れ上限人数）。

心理発達論コース	30名（30名）
子ども発達論コース	20名（20名）
教育科学論コース	16名（20名）
学校教育論コース	28名（30名）

第1回希望調査で心理発達論コースが41名、子ども発達論コースが21名と受入れ上限人数を超え、前者は選抜を行い、後者は協議の上それぞれ上記の人数に落ち着いた。

コース分けに当たり大きな混乱はなく、学科共通授業科目による教育効果が現れ、心理発達論コースへの過度の集中化が避けられたものと判断している。

ただし、今回のコース分けの総括（特に学生たちの声を聞く必要を感じている）、次年度以降の振り分け方法、発達支援論コースの振り分けとの調整等が課題として残されている。

5. 研究

個々の構成員の研究内容についてはすべて把握していない。学科全体としては、現在講座ごとに発行されている研究誌を、新学科においては学科で発行していく必要があるものと考えている。

また、今後、学科全体で取り組まなければならない研究課題を明確にするとともに、その推進に当たっての体制づくりを積極的に行う必要を感じている。例えば、人間形成に係わる諸問題について、学科構成員が幅広く参加し、外部資金を導入して遂行する研究を具体化したいと考えている。

6. 広報

コース分けに当たっての最低限の情報を学生に提供する必要から、『人間形成学科教員紹介』を作成した。

7. 今後の課題

次の1年間に解決を要する課題を列举しておく。

(1) コース分けの方法について

第一希望が各コースの上限人数を上回った場合の選考方法。現行では心理発達論コースが1年次生に対し履修指定科目を設定しているが、学科単位の運営から見てそれが果たして妥当であるか否かや、他のコースも設定すべきであるかを検討する必要がある。

(2) ゼミ分けの方法について

新学科体制においては、3年次生の4月当初から学生をゼミに配属することになっているが、その配属方法を検討する必要がある。その際、発達支援論コースへの所属方法との調整が残されている。

(3) 教育体制の充実のために

年度末に配分された追加予算で、ポスターセッション用のボードと心理統計法用の教材を購入したが、それら予算措置を待たずに学科に配分された予算で学科全体の教育体制の充実のためにどのような方策を取る必要があるかを年度当初に討議する必要がある。

(人間形成学科長 船寄俊雄)

2.5. 人間行動学科

1. 運営

人間行動学科の教員構成員は18名(教授9名, 助教授9名:平成19年2月現在)である。18名は、旧学科体制の身体行動論(9名), 健康発達論(4名), 成人学習論(2名), 児童発達論(1名)及び人間科学研究センター(2名)から構成される, 新しく設置された学科である。履修コースは、健康発達論, 行動発達論, 身体行動論の3コースから成る。学科定員は1学年50名で、A0入試と一般選抜入試により選抜される。学科の趣旨は以下のごとくである。

今日の社会を発展させた人間の行動は、一方では多くの問題も生み出してきました。それゆえ、今、人間行動が問われています。これからは新しい時代に適応するための行動と、人間を取り巻く自然的・社会的・文化的な環境へ主体的に働きかける行動が求められます。人間行動学科は、これらの行動と人間の発達に関わる教育・研究を通して、人間と社会が抱えている多様な課題に取り組み、豊かな生活と健全な社会の構築を目指す新しい学科です。

学科は、学科運営会議と学科会議により運営される。学科運営会議は学科長と3履修コース代表の計4名で構成される。学科会議は18名の学科構成員全員で構成される。学科運営会議は学科長が招集し、学科に関する諸課題を審議する。そして、学科会議での報告・審議事項を検討する。学科会議では、基本的に学科運営会議で審議された事項を検討し、学科としての意思決定をする。また、特定の課題について専門的に審議する委員会も構成する。本年度は、A0入試検討委員会、新入生研修実施委員会、学科教務委員会が設置された。

2. 予算

人間行動学科の予算には、教員研究経費と教育経費がある。研究経費は運営費交付金（含：大学院担当経費）と科学研究費補助金、委任経理金等から成る。教育経費は運営費交付金が割り当てられ、2年次生以上の学生に対する教育経費は各履修コースの学生数に応じて配分し、1年次生に関しては学科共通経費として執行した。

3. 入試

今年度は、A0入試で12名（応募者数69名）、前期日程入試で30名（応募者数119名）、後期日程入試で10名（応募者数55）の計52名が入学した。

(1) 3年次編入学試験

今年度より、新学科としての次年度3年次編入学試験が実施された。今年度実施した履修コースは健康発達論と身体行動論である。

健康発達論講座

- 1) 志願者数及び合格者数：本年度の志願者数は1名、うち受験者数は同数の1名であったが、合格者数は0名であった。志願者数は昨年度と比較すると5名の減少で、一昨年度より1名の減少となる。
- 2) 志願者の特徴：本年は志願者が1名であったが、出願の動機については、例年同様、健康科学への志向を明確にしている者であり、在学している大学での学科も健康科学に関連する学科であった。

身体行動論講座

- 1) 志願者数及び合格者数：本年度の志願者数は11名、うち受験者数は同数の11名で、合格者数は1名であった。志願者数は昨年度と比較すると3名の増加で、一昨年度より2名の増加となる。
- 2) 志願者の特徴：志願者8名の出身大学・学部・学科は例年同様に多様であった。11名中7名が保健体育教員免許状の取得を希望しており、例年同様教員を志望するものが多い。しかし、本年度の受験者では2名が現段階で大学院の進学を希望しており、研究を志向する受験者が増えている。

(2) A0入試

今年度で3年目のA0入試となる。今年度から、昨年度までの「身体行動受験コース」に加えて、健康発達論或いは行動発達論に興味・関心のある受験生を主な対象とした「小論文受験コース」（定員8名）を新たに実施した。それに伴い、2つのA0入試コースの相違点・特徴を明確にするため、「身体行動受験コース」を「身体運動受験コース」と改めた。今年度の応募者は「身体運動受験コース」77名、「小論文受験コース」21名であった。なお、「小論文受験コース」の定員は、一般選抜入試後期日程の定員を当てることとし、その結果、今年度から人間行動学科は一般選抜入試後期日程入試を実施しないことになった。

4. 教育

(1) 新入生研修会

新入生研修会を、5月15日（月）、六甲山YMCAで実施した。目的は、新入生に対する学習指導と、学生と教員との親睦を深めることである。研修会の前半では、コース分け及び各コースの概要の説明に続き、午後に発表を行うグループセッションの説明とグループ分けを行った。グループセッションでは、学生に対して「人間の行動」に関して考えをまとめ、発表す

るという課題が出された。昼食までの間、各グループに分かれて課題発表のための準備を行った。昼食では、グループ毎に、新生が中心となり準備・調理したバーベキューを教員とともに楽しんだ。昼食後は、グループ毎に課題についてまとめを行った後、全グループが研修会場に集まり、1グループ当たり10分間の持ち時間で発表を行った。グループセッションでは学生間での活発な質疑応答が行われた。今年は新生研修会も2年目を迎えたが、課題に向かって自ら考え、解決をするという積極的な学びの姿勢が新生から窺われ、また、学生と教員の親睦の目的も十分果たせた充実した研修会であった。

(2) 履修コース分け

前年度の12月から3月にかけて、1年次生の2年次からの履修分けを行った。各コースの最大定員は、健康発達及び行動発達が15名、身体行動が25名である。履修コース分けは、まず学生の希望で振り分け、次に最大定員以上の場合は成績により振り分けた。その結果、健康発達論コース7名、行動発達論コース5名、身体行動論コース27名という振り分けとなった。2年次からは、各履修コースが中心となって指導することとなる。

(3) 新入生意識調査

今年度も入学時と12月に、1年次生に学部・学科で学びたいこと、将来の進路等の意識調査を実施した。その結果、以下のような回答があった。

- 1) **学部に対する意見**: ネットで検索型にするとか、自分の履修登録したネットのページに対応するリンクをはってほしい、 国文・発達の行き来を少なくしてほしい、 学舎改修、交通利便性発達、掲示板の数、位置、見にくさ、 やはり最初は履修などなにをとればよいかわからずにとまどいました、 発達のトイレをきれいにしてください!! 切実です!!、 校舎が他に比べて汚い気がする。 学部をもっときれいにしてほしい、 もう少し図書館が大きいと良い、 2年次生以上で受けることのできる授業の具体的な内容が知りたいです。
- 2) **学科に対する意見**: 興味のわく授業が多く楽しかった、 後期は身体系の授業が多すぎる気はしなくもないですが・・・、 学科の授業はもう少し基本的なことも教えてほしいです、 20分での移動が大変でした。あと、後期は健康の授業が少なかったのが残念でした、 内容が難しすぎる授業がいくつもあったので、もう少し理解しやすくしてほしい、 自ら意欲を持って行わないと身につくものがない。 個人ロッカーがほしい、 行動学科はとても仲が良くてすごく楽しい1年を過ごせました、 行動学科に入学した時はかなり不安があったけれど、今は楽しい、 充実した1年でした、 人間の身体の仕組みや運動障害の処方についてなど自分のやりたい内容ができるので入学前に抱いていた学習への期待が満たされている、 もっと色々な先生の授業を1年次で受けたかった。
- 3) **卒業後の進路希望**: アスレチックトレーナー、スポーツ報道関係者、針灸・あんま・マッサージ師(専門学校)、一般企業、作品作りがしたい(美術・脚本・演出・監督など)、スポーツ商品の企業、マスコミ関係、カウンセラー、公務員、旅行系(ツアーのプランニングなど)、ミズノかアシックスで商品開発、地域のスポーツセンターの職員、健康指導士、できれば国立スポーツ科学センターでスポーツ栄養士、高校保健体育教師、専門学校 or 教員、まだ迷っています、教師、スポーツメーカー勤務、大学院進学、第一種地方公務員、アメリカ、大学院・スポーツ選手の広告代理人、スポーツマスコミ系、スポーツをプロモーションする立場に関わる仕事、小学校の教師、予防医学に関係する仕事、スポーツとメ

ンタルに関する仕事

5. 研究

本年度は、昨年度学科として取り組んだシンポジウムのようなプロジェクト研究は実施しなかった。各教員個人の研究活動が中心である。学会研究活動の一環として、昨年9月に3日間神戸国際会議場で開催された第61回日本体力医学会大会の事務局を人間行動学科の多くのスタッフが関わり、企画・運営を行った。

次年度は、学科としての研究プロジェクトを進めたい。

6. 広報

(1) 学科シンポジウム報告書の作成

昨年度実施した学科シンポジウムの報告書を作成し、オープンキャンパス、高校訪問等で配布した。

(2) オープン・キャンパス

8月1日(火)、8日(火)の両日午後1時~5時、平成18年度高校生への大学説明会(オープン・キャンパス)を実施した。内容は、学部・学科の説明、各コースの説明、カリキュラムの説明、入試の説明、全体及び個人的質疑応答である。第1回目は176名、2回目は152名の参加者があり、昨年以上の盛況振りであった。

(3) A0入試パンフレットの作成と高校訪問

今年度はA0入試に「小論文受験コース」を新たにスタートさせたこともあり、A0入試パンフレットを全面改修するとともに、高校訪問を強化した。例年どおり京阪神地区の高校を中心に訪問するとともに、今年度は四国地区・北陸地区も重点的に高校訪問し、A0入試の紹介を行った。

(4) 神戸大学東京フェア

今年1月12日、東京(ホテル・フロラシオン青山)で開催された神戸大学東京フェア~未来づくりは神戸から~に、人間行動学科から2つのパネル紹介を展示した。

「人の身体適応能をもとにした生活環境支援」(近藤徳彦教授)

「人の動きにマッチしたスポーツ用具の開発」(前田正登助教授)

7. その他

(1) 人事

本年度、1名の教員が講師から助教授へ昇任した。また、3名の教員が大学院総合人間科学研究科前期課程担当に、その内1名が後期課程の担当も承認され、学科全教員が大学院担当となった。次年度からは、発達科学部から大学院人間発達環境学研究科人間行動専攻の教員となる。

(2) 大学院改組と学科

今年度大学院総合人間科学研究科の改組が決まり、次年度から大学院人間発達環境学研究科となり、全員大学院担当教員となる。この改組に伴い、健康発達論コース教員は、大学院心身発達専攻に所属することになった。これにより、学部と大学院の一貫性は組織上なくなり、ねじれた形となる。今後どのように推移するかまだ不明だが、人間行動学科としての理念・教育研究を維持しつつ、新大学院専攻間で共同して進みたい。

(人間行動学科長 平川和文)

2.6. 人間表現学科

1. 運営

学科改組に伴い人間表現学科として発足し、2年目を迎えた。運営については学科運営会議を構成し、学科運営に関するさまざまな問題について対応することとしている。毎月1回の定例会議を予定していたが、本年は学科全体で話し合う内容が多く、運営会議は4回のみ、教員全員による学科会議を開催しそれに代えた。運営会議の組織形態は、学科長及び各コース主任3名の計4名、会議への出席率は100%であった。学科会議は20回を数え、出席率は80%程度であった。他に学科独自の委員として、人間・行動表現学科(3年次生以上)講座主任2名、会計、教務、電子情報(兼ホームページ)、広報担当、各2名、入試実技検査担当各1名の3名、及び新入生相談教員(兼学生担当)1名を置き、それぞれの任務を遂行した。

教員の動向としては、1名が年間を通しての育休、1名が後期より育休から復帰、1名が後期より転出となった。教育に関して、転出及び休暇中の教員の担当科目は非常勤講師で補うことができたが、後期は総勢で14名という教員数の学科のため、入試実務などに当たっては、かなり厳しい状況であった。

2. 予算

本学科では、各教員研究費から一律に拠出されたものを学科共通予算としているが、主たる用途は複写費となっている。その内訳は、複写機リース基本料及び複写枚数に応じた費用で、教員各自が負担することになる用紙購入費は含まれていない。

3. 人事

割愛人事1件、昇任人事1件を人事委員会に提起し、教授会で承認された。採用人事1件は、大学院改組絡みの公募要件をすべて満たす候補者が見つからず、人事選考委員会を解散することが教授会で承認された。

4. 入試

学科として初めての第3年次編入学試験及び前期日程・後期日程入試、社会人特別選抜試験を行った。

(1) 前期日程実技検査

新学科としては、2回目の実技検査となるが、昨年と比較した場合、全体的に受験生数が増加したことで、後期日程を併願する受験生が多くなったことが挙げられる。昨年は、後期日程で実技検査を行わないなど、新学科として初めての試みがなされたため、受験生が様子が分からず、他大学を併願するパターンが多かったのではないかと推察され、一昨年までの状況に戻ったとも考えられる。併願していない受験生の後期日程の志望大学及び学部は多岐に渡り、様々な領域に興味を示しているようであるが、多様な人材を求める当学科の意図が受験生に浸透しつつあるという見方もできよう。

音楽受験

志願者・受験者ともに56名、前年度より4名の増加。合格者・入学者ともに12名。実技検査の内訳は、声楽1名、フルート3名、クラリネット1名、マリンバ1名、ギター2名、ヴァイオリン1名、箏1名、電子楽器5名、ピアノ41名。

美術受験

志願者・受験者ともに34名、合格者・入学者ともに13名。前年度に比べ8名の増加となった。入試問題などの改善策が受験生に好意を持って受け入れられたのではないかと考えら

れる。

身体表現受験

志願者・受験者ともに13名、2名の増加、合格者・入学者ともに4名であった。身体表現受験は2年目の実施となるが、前年度と同様、多様なパフォーマンス（バレエ系、モダンダンス系、ストリートダンス系、演劇系等）を見ることができた。来年度以降も引き続き、受験生の動向に注意を払いたい。

(2) 後期日程入試

志願者86名、受験者50名、合格者11名、入学者は10名。実技検査を課さなくなると2年目の試験であるが、前期日程と併願する受験生が前年より増加し、人間表現学科に対する強い意志が感じられる。入試方法の大幅な変更による入学者のキャラクターに大いなる期待が寄せられる。

(3) 社会人特別選抜試験

本年度の志願者・受験者は2名と例年より少なく、合格を認める水準に達していなかったため、残念ながら合格者なしという結果となった。

(4) 第3年次編入学試験

人間表現学科として初めての試験を行なった。試験科目は「人間表現に関する実技」或いは「論述」のいずれかの選択、及び面接の2科目が課され、最終的にはこれらの成績を総合して合否が判定された。論述については、各コース独自の出題によって行うなど、試験は基本的に募集単位である3コースで行ったが、実技については演奏、演技、制作と多様なため、それぞれの内容別に行った。各コースで1名程度という試験のために3科目の論述、3種目の実技、計6つの内容の試験が行われ、試験計画や実施、集計・判定が極めて煩瑣なものとなった。このことは次年度への大きな反省点とすべきである。

表現学科全体の志願者及び受験者は23名であった。新学科であるため過去の受験者数と比較できないが、昨年度の音楽表現論講座と造形表現論講座の受験者数である12名と比較してみた場合、約2倍となる。このことは演技という種目が加わったこと、論述と実技検査というシンプルな試験科目になったことが要因として考えられるが、学科再編成による効果もプラスに働いているともあげられよう。初年度につき詳細を次に挙げる。

表現文化論コース

志願者及び受験者は5名、合格者は1名であった。志願者の特徴として、出身大学は国立文系及び理系、私学音楽学部、私学教育系、私学短大等、多岐に渡る。志望動機は、自分の現在の勉学を広げたいもの、進路を変更したいものの両者があり、希望の勉学ジャンルはファッション、教育、マネジメントなど多様であった。

表現創造論コース

志願者及び受験者は10名、合格者は2名であった。志願者の特徴として、出身大学は国立文系及び理系、国立教育系、私学教育系、私学文系、私学音楽学部、私学美術系、私学短大等、多岐に渡る。特筆すべきは国立博士課程出身という者もいたことである。志望動機は、自分の現在の勉学を広げたいもの、進路を変更したいものの両者があり、希望の勉学ジャンルは実技を含む音楽関係が多かった。

臨床感性表現論コース

志願者及び受験者は8名、合格者数は1名であった。志願者の特徴として、出身大学は国

立文系及び理系，国立教育系，公立文系，私学教育系，私学音楽学部，私学文系，私学短大等，多岐にわたる。志望動機は，進路を変更したい者ばかりであり，希望の勉強ジャンルは音楽療法とダンスであったが，音楽療法を希望する者が目立った。

5. 教育

(1) 1年生への指導体制

新年度開始時に教員全員参加によりオリエンテーションを行った。内容は，学科紹介，教員紹介も含めたコース紹介及び履修等についてである。5月初旬には，当学科を志望した理由，学科の情報入手方法などを含むアンケート調査を行った。また，同時期に新入生相談教員及び2年生（人間表現学科1期生）を中心に新入生を囲む懇親会を神戸大学瀧川記念会館にて開催し，学科教員，2年次生及び教員ゼミ所属の3，4年次生（人間行動・表現学科生）有志が参加し交流を図った。

(2) 履修コース分けについて

平成19年1月下旬に2期生に対してコース分け説明会を開催し，希望調査調べを行った。その内訳は，表現文化論コース5名，表現創造論コース18名，臨床・感性表現論コース17名であるが，定員を超える希望が出ているコースがあるため，現在調整中である。

(3) ゼミ配属について

新学科としては初めてのこととなるが，2月から3月にかけて，コース主任を中心に2年次生（1期生）に対してコースごとゼミ配属を行うこととしている。

(4) 卒業研究発表会他

当学科にはまだ卒業年次生はいないため本年は特に何も行ってない。

(5) 学科共通科目について

学科開講の1年次の学科共通科目は，共通基礎必修科目として各コースの概論3科目，選択必修科目として3科目が開講されているが，全体を通して出席率のよい授業が展開された。

6. 広報

(1) シンポジウムの開催

平成18年度8月18日，神戸大学六甲ホールにおいて，一般市民及び本学科学生を含め計200名ほどの参加のもと，シンポジウム「即興・表現・生」を開催した。本シンポジウムは，現代さまざまな芸術ジャンルで行われるようになってきている「即興」という行為について，音楽を中心とした多角的な立場から議論することを目的とした。そのなかで，アーティストの生のパフォーマンスの場を設け，実際の表現行為を提示し，その交流を図ることも大きな目的とした。

参加シンポジストは，江崎将史（即興演奏家），石村真紀（音楽療法士，相愛大学助教授），藤本由起夫（サウンドアーティスト），山田衛子（即興演奏家，音楽教育家），堀尾貞治（美術家），岩井正浩（本学部教授）の6氏，本学部教授，若尾裕がコーディネーター・司会を務めた。議論の間にパフォーマンスを挿入しながらの，たいへん活気に満ちたイベントとなった。なかでも神戸在住の美術家，堀尾貞治氏の美術パフォーマンスは多くの注目を浴びた。

このようなテーマ・形でのシンポジウムが行われたのは，恐らく初めてのことと思われ，関東からの参加者も多く取材などもあり，新学科をアピールする絶好の機会となったことと思われる。

(2) オープンキャンパス

8月2日及び9日の両日にわたりオープンキャンパス（高校生説明会）を行った。内容は、新しい表現学科の理念を中心とした学科紹介、行動・表現学科とは根本的に異なる3つの履修コースの理念や特徴の紹介、教員紹介などを行った。その後、施設設備見学、参加者と学生との懇談なども行われた。初回は140名、2回目は170名といった多数の高校生及び保護者が参加し、時間をオーバーするほどの活発な質疑・応答が行われるなど大きな関心を寄せられる意義深い説明会であった。

資料として、昨年度作成の学科案内リーフレットを参加者に配布した。なお、この学科案内リーフレットは関西圏内の高校（主要校、本学科在学生の卒業校、教育実習校など）にも配布し、また、各教員の専門性に関係するコンサートホール、美術館、ギャラリー、その他の文化施設等にも配布している。この学科案内リーフレットは学部案内パンフレット等とともに各機関への送付等も予定しており、広く情宣活動に生かすことになると考えられる。

(3) ホームページ

学科発足に先駆けて開設されたホームページ（HP）のコンテンツは学科紹介、教員一覧、教育内容、入試情報、学科に対するQ&Aなどであるが、特に初年度の入試の後、実技考查科目の情報を中心に項目を追加し情報発信した。これまで、受験生から寄せられた入試に関する事項を中心とした多くの質問に対して個々に回答してきているが、必要と思われる事項に関しては、HPのQ&A欄に掲載した。また、オープンキャンパスの際寄せられた質問についても、受験生の公平性を保つために必要と判断されたものに関しては掲載することとした。HPは、学科の情報発信の場として今後さらに充実させ、情報発信してゆく予定である。

（人間表現学科長 齊田好男）

2.7. 発達支援論コース

発達支援論コースは、3年次の学生を受け入れる学部横断コースであり、平成19年度にはじめて学生を受け入れることとなっている。そのため、平成18年度にはコース進学のための履修要件の決定と進学を希望する学生のためのガイダンスを行った。発達支援論コースに進学するためには2年次に「発達支援論A」又は「発達支援論B」のいずれかを履修しておく必要があるが、平成18年度には「発達支援論A」は33名の受講者が、「発達支援論B」では45名の受講者があった。このうち、発達支援論コースへの進学希望者は15名であり、平成19年2月24日に面接（口頭諮問）を行い、全員の進学を決定した。また、平成19年度の編入学生は1名であり、計16名が平成19年度の発達支援論コース所属学生となる。

（発達支援論コース主任 朴木佳緒留）